2018年1月16日
日刊建設工業新聞（東京会場）

総合資格

17年度1級建築士試験

占有率初の7割超え

3人に2人が学院出身に

総合資格学院を運営する総合資格（岸隆司社長）は17年度の1級建築士試験で、学科・製図試験のストレート合格者を1105人輩出し、全国の同合格者1564人に占める割合が、1980年の開校以来初めて7割を突破した。また、全国の合格者3365人に占める同学院の占有率も63・7％に達し、ほぼ3人に2人が総合資格学院の受講生となった。多数の合格者が一堂に会する合格祝賀会（東京会場）を訪ねた。

岸社長を囲み合格者で集合写真

毎年成人の日に行われる合格祝賀会は同学院の恒例行事で、今年は1月8日に北海道から沖縄まで46カ所（山梨は1月13日開催）の会場で開催された。その中で、1級建築士合格者を578人と最も多く輩出した東京会場には合格した受講生をはじめ、その家族や来賓、講師など約700人が出席し、合格を祝った。

開会の冒頭、岸社長は「ストレート合格者占有率7割という数字が示す通り、1年で1級建築士に合格するなら、当学院を利用してもらうのが最良ということが証明できた。受講生の不断の努力と、講師、職員の熱い指導に感謝と敬意を払いたい」と祝辞を述べるとともに、「18年度は全国ストレート合格者占有率で最低でも8割以上を達成するため、講師、職員とともに講習システムを改善し、指導体制を強化していきたい」と力強く抱負を語った。

続いて来賓祝辞で建築家の伊東豊雄氏は「ストレート合格者占有率7割は本当にすごい。先生の情熱とクオリティーが素晴らしいのだろう。建築士になった皆さんには、高層建築とか公共建築とか大きな施設だけでなく、空き家の改築や少子高齢化の激しい街の再生などにも取り組んではどうか。自分なりに建築が社会にどう役立つかを考えて、自覚を持って10年間修練してほしい」と新たな建築士たちにエールを送った。

全国ストレート合格者

この後、近角真一東京建築士会会長、児玉耕二東京都建築士事務所協会会長、藤沼傑日本建築家協会関東甲信越支部長、古谷誠章日本建築学会会長らが祝辞を述べた。続いて修了証授与式では、2級建築士に合格した田中貴之さん（吉祥寺校）と1級建築士に合格した辻啓太さん（五反田校）の2人に、岸社長から修了証と記念品が授与された。

修了証を手に田中さんは「働きながら本当に勉強ができるか不安だったが、講師の方々の熱意が伝わり、必ず合格するぞという強い気持ちを持ちながら勉強することができた。友人とともに合格できて本当にうれしい」と喜びを語った。また、辻さんは「教務の方々が口癖のように言われていた『悪いようにはしないから、私を信じてついてきてほしい』という言葉に支えられ、勉強を続けることができた。先生方の懇切丁寧な指導に心から感謝している。幼少のころから自分の家を設計するのが夢で、少しは夢に近づけたとは思うが、建築士の資格取得はゴールではない。皆さんとともに新たな第一歩を踏み出したい」と力強く抱負を語った。

また、祝賀会に先立ち行われた講演会には「ROKI Global Innovation Center－ROGIC－」をテーマに建築家の小堀哲夫氏が、台湾・台中市で自身が設計を手掛けた「台中国家歌劇院」について、伊東豊雄氏がそれぞれ講演した。

小堀氏は、講演の中で「組織設計事務所に勤めていた際に、早く独り立ちしたいという思いから『誰よりも早く資格を取得すること』を志した」という自身の経験を話し、総合資格学院に通って1年で資格を取得したことを披露。寮の中で一人ストイックに学習を続けて、10年分の過去問を5回繰り返したエピソードも学生たちを前に語った。

伊東氏は、16年9月にオープンした台中国家歌劇院について「ポルトガルでの屋外コンサートの体験から、街の中にいるような楽しいコンサートホールを設計したいというコンセプトで臨んだ。完成した建築では、劇場でイベントがない日でも、踊り場やホール等あちらこちらでコンサートが行われており、それを見に多くの人が訪れている。人々は、建築の中をぶらぶら気軽に歩いたり、階段に座りこんでコンサートを聴いたりしており、それが、まるで街中のようで一番うれしかった」と語った。

さらに台中について、「アバンギャルドなものを許容する素地と元気な建築を作れる素地」があり、「似通った均一的な建物が多い中で、台中国家歌劇院は他の建築と違うため、これだけの人が訪れている」と分析。「建築は、ものすごいエネルギー量を必要とするものであり、その要したエネルギーが人々に還っていくことが重要だ」と持論を語った。

岸社長を挟み伊東氏㊧、小堀氏と記念撮影

記者手帖

記憶持続し防災・減災

先日、東日本大震災の発生直後から港湾工事の専門家として航路啓開や復興に取り組んだ技術者を講師に招いた講演会の取材をした。東日本大震災は、発生から7年がたとうとしている。当時の悲惨な光景をテレビ映像で見た時の驚きが自分の中で薄らいでいることを実感し、反省した◆東日本大震災の発生時は、四国でも携帯電話がつながりにくくなり「どうしたんだろう」と思っていたら、東北地方で地震が発生し、大規模な津波が襲来していることをテレビが伝えてきた。画面を見ると、とても現実のものとは思えず、映画の特撮シーンを見ているような錯覚に陥ったことを覚えている◆四国では、南海トラフ巨大地震の発生が危惧されている。建物の耐震化や津波避難タワーの建設、避難路の整備などが進められるとともに、一般市民も参加する防災訓練も各地で実施されている◆大きな災害が発生すると、復興には膨大なエネルギーと時間を要する。自然の力には勝てないが、防災・減災への取り組みで被害を最小限にくい止めることはできる。その重要さを改めて感じた。（宮）

ブランド力高め存在感を